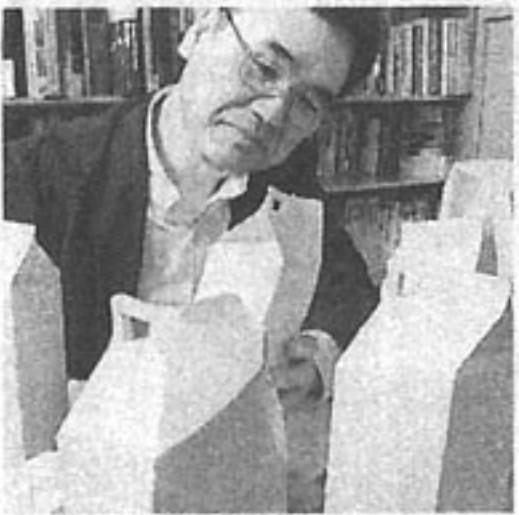


牛乳などに使われる紙パックに半世紀ぶりに新形状が登場した。上部を左右非対称にした点と、注ぎ口に曲線をつけ注ぎやすくした点が特徴。日本大学芸術学部の学生らが紙パック大手の日本紙パック（東京・千代田）と共同で開発した。指導に携わった肥田不二夫教授は「学生の苦勞が詰まったデザイン。ぜひ多くの企業に使ってほしい」と訴えている。

容量は920ミリリットル。注ぎ口が急須のような形になり液体が一度たまるため、傾け過ぎで液体が急に流れ出してこぼれるのを防ぐことができる。

2007年10月に、日本紙パックが日大芸術学部にてデザインを依頼。研



注ぎ口が急須のような形になっており、傾け過ぎで液体が急に流れ出すのを防ぐ

新形状の紙パック——日本大学 学生10人、1年で試作品600種

究に参加を希望した当時のデザイン学科の1年生10人が約1年をかけ開発した。

「紙パックなんてすぐできるだろうと思いい年生に任せた」（肥田教授）というプロジェクトだったが、考えはすぐに改められた。

現行デザインは半世紀前の設計ながら生産性、運搬性、耐久性に優れ、手を加えると利便性が失われた。週1回の研究会は夕方から夜9時過ぎまで続き、自主的な集まりも重ねた。寝ても覚めても紙パックばかり考える毎日。試作品は600種類をゆうに超えた。

こうして完成した10種類のデザイン案を学生が日本紙パックの社員に提案。優秀なデザイン2点を元にさらに3年半、日本紙パックが製造設備の改良案など開発を進め、製品化にこぎ着けた。

肥田教授は「『成果を出せないかもしれない』と不安になったこともあったが、学生が頑張ってくれた。この経験を通じ、社会で働くことの責任と喜びを感じてくれたと思う」と話している。